

令和3年度文化審議会文化財分科会企画調査会(第2回)

大工工事請負者(元請)が木工技術や技能の継承を通してみる
文化財建造物保存修理工事の課題

(一社)日本伝統建築技術保存会
会長 鳥羽瀬公二

「見習い」を「伝統大工職人」に育成するための課題

1. 一般大工の住宅工事は工場でのプレカット工法に変わり、伝統大工の技術が不要になっている
→大工技能ピラミッドの底辺部が欠如
2. 文化財の大工工事は、伝統工法を扱う工務店の仕事の一部となっている
→伝統工法を習得した大工がさらに文化財修理現場や文化財木工研修などを通じて技術研鑽し、文化財修理技能を身につける
3. 大工仕事の幅は広く、学校や講習などでは必要な知識の一部は得られても、職人は育てられない
→長期間にわたり現場で木に直接触れる「見習い期間」が必要
4. 伝統建築の技能を習得するために見習いへ支払う賃金をはじめ、寮などの労働環境、安全環境など、育成するための経費は工務店(雇用主)が負担しなければならない
→文化財工事に特化した見習い補助制度はない

オーセンティシティー(同材種・同品質・同技術)を守るために必要な文化財修理用木材調達の課題

1. 大径材・特殊材などが必要な工事の場合、修理工事落札後に調達を行うため、材木を確保するまでの期間が必要となる
2. 市場に流通する末口 60cm を超える檜の大径材の場合、年間取扱量 6 万 m³ (原木体積) の原木市場 (松阪) でも年に数本出る程度。
→100 年～200 年後の根本修理の時に大径材など出ないのでは(市場関係者)

◎全国の原木市場で特殊材・大径材の流通の状況の推移・未来予想などの調査は出来ないか

3. 集成材・CLT材などのための原料を供給する林業家が主になり、伝統建築のための長伐期材を育てる林業家が減少している
4. 中世以降に建設された建造物は、松・梅を主材とするものが多いが、松枯れのため松は非常に減少している
→兵庫県では（公社）兵庫県緑化推進協会が森林ボランティア支援事業にて里山の整備・アカマツの植栽などを実施
5. 松・梅・栗・樟・桜などの特殊材は秋から春にかけての時期にしか伐らず、入手に時間が必要（虫害・青かびを避けるため）
6. 文化財工事を施工する工務店の中には、日頃から特殊材・大径材を少しずつ購入し、乾燥させ、何時使うか分からない木を貯蔵せざるを得ない状況
→業者がリスクを負担しなければならない（雨掛の中広縁板などの大径材など）
7. 文化財の維持のためには、200年先を見据えた適切な森林管理が必要
→無くなってから慌てても、木はすぐには大きくなる

「文化遺産を未来につなぐ森づくり会議」の取り組み

- 文化財補修用材の確保という視点から、林家への対応、森林の維持管理のあり方について
 - 現在全国で47件56（名・団体）の山主が、「私の山を文化材の森に」へと登録している
1. 文化財補修用材として超長伐期施業に取り組む林家や林業従事者への助成制度（検討中）
 2. トレーサビリティに関して
→日本の林業家は自分の山から出した木がどこに使われているのか全く分からない（流通が不透明）
→建築技術に加え、育林から伐採、製材技術まで含めてトータルに考える必要がある（木造文化財維持のためには林業者側と建築技術者側が、もっと顔の見える関係になった方が良い）
 3. 文化財修理用材の見積りの値段、出し方の基準をつくれぬか
→高齢樹指数のような数字を作って、上乘せ出来る様にする等（検討中）
→檜の大径材で原木 m^3 単価230万/ m^3 ～100・80万/ m^3 など（製品にすると4～5倍、板類にすると7～10倍になる）の値段が付くのを目の当たりにする